

ねこの みもの

猫藪通信

第 2 3 号
平成八年
(1996)
4月15日発行
(年4回発行)

花乞食

東 明 雅

芦丈先生の花の句に「雲よ霞と六十余年の花乞食」という発句がある。これは先生自身が先生の一生を詠まれた俳諧師の自画像であるろう。「雲よ霞と」とは自然にあこがれ旅を行く身を暗示しており、「乞食」とは芭蕉の言う風流の極に至る理想の境地であるろうが、ただの乞食と異なり、花にあこがれ、旅に浮身をやつす、いわば西行・宗祇、そして芭蕉を佛にした、謙退と自負の微妙にからみ合った気分を表現している。

この句を拜見したのは、昭和六十年、猫藪の方々十五名を連れて、伊那にある故芦丈先生の墓にお参りをし、翌日芋庵に根津美紗さんを訪ね、脇起りの二十韻を巻いた時であった。この旅の途中、高遠城址で満開のコヒガンザクラの艶麗さに遭遇して皆魂を奪われて

いた時であったから、一段と感銘が深かったのである。その時、私も先生にならない花乞食になろうと決心した。

翌六十一年から私の本格的な花乞食の旅が始まる。四月も半ばころ、まず、吉野をめざして十三名で出かけた時の紀行と作品、二十韻六巻は「季刊連句」第十三号に掲載されているが、今読んでも懐かしい。私が子供の頃から見馴れていた桜は大方ソメイヨシノであった。それも決して美しくないとはいわなかった。けれども、吉野に来て咲きみちているヤマザクラを見ると、第一、花の品格が異なる。それはお白粉をべったり塗った玄人女と、化粧もろくにしていけない深窓の窈窕たる美女とをくらべるようなものである。私は吉野に来て始めて本当の桜花の美しさを知ったのであった。

次の年は岐阜県根尾谷の淡墨桜を見に行った。この桜は甲斐の山高神代桜に次ぐ日本第一の老樹だそうで、樹齢千四百年余、継体天皇のお手植えという伝承がある。何しろ枯死寸前から甦った巨大な樹幹は盤根錯節、見る者を圧倒せずには置かない。何十本もの大きな支柱でやっと支えられながら、ヒガンザクラ独自の端麗な白色の花を霞のようにたなびかせている老木は、健気というか見事というか、この感銘も忘れがたいものである。

序であるから、その後、私が見た有名な桜を列挙して何かのご参考にしようと思う。

- | | | |
|--------|-----|--------------|
| 昭和六十三年 | 小田原 | 長興山の桜 |
| 平成二年 | 福島 | 三春の滝桜 |
| 〃 三年 | 青梅 | 金剛寺の桜 梅岩寺の桜 |
| 〃 〃 | 京都 | 常照皇寺の桜 |
| 〃 〃 | 大阪 | 弘川寺の桜 通り抜けの桜 |
| 〃 四年 | 山梨 | 山高神代桜 |
| 〃 〃 | 秋田 | 角館武家屋敷の桜 |
| 〃 〃 | 盛岡 | 石割桜 |
| 〃 五年 | 京都 | 祇園 平安神宮 清水 |
| 〃 〃 | 〃 | 勝持寺、善峰寺の桜 |
| 〃 六年 | 〃 | 醍醐の桜 鞍馬の雲珠桜 |
| 〃 〃 | 埼玉 | 秩父の桜 |
| 〃 〃 | 志賀 | 婆婆羅の桜 |
| 〃 〃 | 兵庫 | 三田の桜 |
| 〃 七年 | 福島 | 会津五桜 |

このように多くの桜を見て来たが、見る時期、その日の時間・天候、その桜の種類、場所、環境などによって、さまざま新たな印象を受け、感銘が生まれる。あるいはその時の自分の心身の状態、同伴者によってもそれは異なり、決して同じではない。俳諧師は興行の時、花の句を求められる場合が多いが、その前句はまさに千変万化である。そのさまざま前句に対する為には、何よりさまざま観桜の経験と記憶を持つことが、その花の句を力強い自信のある句となす最も有効な方法であろう。私は今後、ただ、昔のように焦らずに、花乞食の旅を続けて行きたいと思う。

祝辞

東 明雅

芙紗さん立机おめでとう存じます。

言うまでもなく、立机というのは一人前の俳諧師として、世間から公認されることです。ご本人はもちろん喜んでおられる事でしょう。そのご本人は別として、今度の立机を一番よろこんでいるのは、かく申す私です。それは何のお役にも立ちませんでした。とに角こうしてこの席に列なつて、祝辞を申し上げるだけで、ご生前の芋庵一世根津芦丈先生のご恩に万分の一でもお報いする事ができるだろうと思つてあります。

本当に芦丈先生にはお世話になりました。芦丈先生は私だけの先生ではなく、現代の連句人全体の先生です。それは私どもに正しい俳諧の伝統をつたえ、新しい連句の道を指し示された大恩人であります。

もし、昭和四十年代まで先生が生き延びて下さらなかつたら、現代の連句の復興はあり得なかつたでしょうし、よしんば復興はしてどのような邪道に進んでいたか考えてみるだけでぞつとします。

いわば、現代連句の教祖であり、芋庵のあるここ伊那は連句のメッカでありましょう。しかるに、昭和四十三年に先生ご逝去のあとは、ご次男故忠二先生が父上の跡を襲ごう

と努力されましたが、残念ながら中途で倒れられ、跡をついで芋庵を守るのは芙紗さんだけになられたのです。

芙紗さんは皆様ご承知の通り、芦丈先生が一番可愛がっておられたお孫さんで、長い間芦丈先生と芋庵で暮され、その間にいろいろ教を受けられた様子は、私が一昨年出版した「芦丈翁俳諧聞書」に、芙紗さんご自身で書かれた通りです。

芙紗さんも芦丈先生の跡を襲ごうと努力されましたが、おつとめの身でもありません。思うようにならなかつたのは事実でありました。

これでは地下の芦丈先生、忠二先生も本意であろう。何とか伊那の連句がまた盛んになり芋庵が中心になるような手だてはないかと考え、退職されるのを機に立机されたらと考えておりましたところ、去年宮脇昌三先生より同じ考えが伝えられ、芦丈先生の文台を故忠二先生にお譲りして二世芋庵を追号し、芙紗さんは忠二先生から文台を譲られて三世を称するといふ事になつたようで、もちろん芦丈先生、忠二先生は故人でありますので、宮脇さんに代わっていただいたというわけでありませぬ。

これは、おそらく地下の芦丈先生、忠二先生に何のご異存があるう筈はなく双手をあげて賛成し、よろこんで下さっているに違いありません。

私が先生方のご恩の万分の一に報い得たところよぶのはこの事でありませぬ。

このように、普通の人の立机とはやや異なつておりますので、芋庵三世となられた芙紗さんは、芦丈先生、忠二先生を凌ぐようなすばらしい宗匠になつていただきたいと存ずる次第であります。

さらに、この席をお借りして一座の皆様からお願い申し上げたい事がございます。

こうしてめでたく立机致しました芋庵三世芙紗さんをどうか皆様盛り立てて下さるよう。ここが連句の宗匠と俳句の先生の相違点で、俳句ならば仲間、弟子などが盛り上げずともよい俳句すばらしい名句さえ一人でどんどん作つて行けば、それで結構名人、上手ともてはやされるようになりますが、連句は個の文学ではなく、座の文学、衆の文学ですから、いかにその宗匠がすぐれていようと、連衆が協力して、盛り立ててくれなければ、よい作品が生まれるわけがなく、名人、上手と言われる事も不可能であります。

皆様には何卒そのところをよくお考え下さつて、立机した、ああめでたしめでたしだけ終わらず、極力宗匠をたててもり上げて下さるよう。これは余計な事かも知れませんが、皆様に私からお願いして祝辞の代わりと致す次第でございます。

平成八年三月六日

根津美紗丈立机式のこと

宮脇昌三

単に長野県の信大連句会に止まらず、やがて猫養会となつて全国的な影響力を持つに至つた、その信大連句会発足に当り、東明雅教授と相計り、忘れもせぬ昭和三十六年九月三十日、根津芦丈翁を初めて信州大学理学部にご案内申しあげ、ひきつづき教導を忝うした翁の恩義は忘るべくもありません。

昭和四十三年二月翁無きあとは、子息忠二氏も信大連句会に入りこの道に精進しましたが、氏も昭和五十六年、惜しくも病没され、あとに残つた愛孫美紗（本名房子）女も、幼きより翁の感化を受け、翁に連なる連句会にも出て学び、昭和六十一年九月より、私も加担して当伊那市に連句会を設け月に一回の例会を持ち、当地の連句愛好者を集め、その都度半歌仙あるいは二十韻を巻いてきたのであります。

今年平成八年、会も十年の歴史を重ねてきまして、今回一同相計り、当日は猫養会より東明雅会長御夫妻、副会長桃径庵和子氏、また会員中川哲氏の御臨席を忝うして、^{からむし} 芦庵三世美紗宗匠文台開きを挙行いたしました。

免状

俳諧上達につき
立机相許し候事
平成八年三月吉日
芦庵 根津芦丈^御
代 宮脇昌三^御
芦庵二世
根津忠二丈

免状

俳諧上達につき
立机相許し候事
平成八年三月吉日
芦庵 根津忠二^御
代 宮脇昌三^御
芦庵三世
根津美紗丈

当日は簡素にしつらえた式場に一堂列座し、わたくしが右の二葉を朗読し、美紗女がうやうやしくこれを受け、改めてこれよりさらに斯道に精進し、父祖の志を継ぎたいと述べた時、長い間のわたくしの任務の一つが終わつたような安堵感を覚えたことでありました。

二十韻「芦丈の名も」

宮脇昌三 捌

「美紗女襲名を祝ひて

芦丈の名も久しかるべし接木して

昌三

馴れぬ袴にもどかしき春

美紗

雛靴きじ鳩の来てつつくらむ

澄子

猫がぐるりと一廻りする

哲

児は寝ねて差しつ差されつ月天心

惠美子

指にも触れず霧に佇む

比呂志

茸狩人目もなきを確める

哲

住専議會今日が山場か

比

ダンベルで健康体操大はやり

美

中年女性のパワーあふれて

澄

煤拂ひ天井裏の稀観本

哲

厳寒露西亜に墓標残れる

昌

二日前延命治療ことほりし

美

解かれて長き夏帯の人

比

雷にまた邪魔された嫦娥殿

哲

わらっているさ泣いちゃうからさ

美

出題の難問抱へて変声期

惠

酔のきき過ぎた青饅に噎せ

比

競争下プレゼンテーション花筵

美

山笑ひだし水走りだす

澄

平成八年三月六日 於 坂下公会堂

◎ 次号では、立机された根津美紗氏に、芦丈翁や美紗氏を育んだ伊那の風光についてご執筆をお願いしております。

歌仙「餌台に」

東明雅 捌

餌台につがひ眼白の淑気かな

明雅

メゾソプラノのひびく初春

蕉肝

五加飯釜いっばいに炊き上げて

富美子

物種を蒔く庭の片隅

順子

土星の輪消失したか朧月

一郎

獅子も麒麟もあくびしてをり

淑代

落慶の祝ぎに婆羅門乱舞する

玲

夢の芯までしみる薫香

肝

コテージが裾にひろがる休火山

代

日焼けの肌に伸びる君の手

郎

緑陰を出でて他人となる二人

順

定番料理けふもカレーで

美

口笛を鳴らす少年下り築

代

残る蛍の闇の静けさ

玲

神垣の参道ほそき月あかり

肝

切れし煙草を買ひに走らす

代

花の里コンピュータと隠れ住み

肝

孕み鹿来る窓のガラス戸

美

風光る和蘭陀坂に大道芸

代

政権交替あつという間に

玲

独り酌む徳利四五本午後三時

郎

多年のテーマ蚤虱尿

同

夏炉焚く曲り家の婆老いにけり

代

清浄野菜籠に溢れる

順

コロラドの水積みルート一号線

代

ルームナンバー口紅で描き

順

力づく引きほどかれし昼夜帯

美

空を行く月知らぬ顔して

同

やや寒の西郷どんに敬礼し

玲

虫の音近き浮浪者の宿

肝

亡き母はいつも今頃冬支度

順

パッチワークの絹の壁掛

玲

処女作の刺繍に生涯こだはりて

同

小舟で軽く破る薄氷

肝

碧落に天狗騒ぐか花吹雪

雅

谿に眠を覚ます佐保姫

玲

平成八年一月十七日 於 江東区芭蕉記念館

玲

連衆 近藤蕉肝 大島富美子 和田順子

和

古賀一郎 浅賀淑代 日高玲

樹

歌仙「飾海老」

和

飾海老拝し立役楽屋入り

啓子

さざみ柝の鳴り籟初の笛

和子

臘梅の香りほのかに流れきて

欣二

色とりどりのデイパック行く

代々子

月仰ぐアームをのぼすエンデバー

利子

非常階段松虫の声

秀樹

今年綿紡ぎ車を教はりつ

和

はにかむ笑顔僕のタイプで

代

こっそりと磨きをかけた若づくり

利

門の門外れなくなる

代

急患の知らせに探すコンタクト

樹

天地ゆらりと泳ぐ子子

和

竹落葉地震の慰霊の寂の月

代

御影代々酒処消え

二

我先にインターネットビジネス化

樹

尻の形にへこむクッション

同

紅玉の小櫛に花の散りかかり

二

格子の窓に寄れる子雀

利

春埃高速度路混み合ひて

樹

渡す禪の重き駅伝

和

新首相霞張では困ります

利

透いてみゆるは妖怪の金

和

パノラマで五百羅漢の大写真

樹

何でも開運鑑定団呼ぶ

和

凍土に猫の集会催され

代

不倫復縁風流な人

樹

なにげなく腕まはしてブラはづす

二

嫁はんやがて山の神なり

利

数へれば浮世の月も見尽くして

和

李白気取りの重陽の酒

利

エジプトにさらなる古跡秋深し

代

用途わからぬテラコッタ買ひ

二

やんちゃして手形くつきり床の軸

代

塵芥分別のけふは何の日

利

花の奥願ひの石の祠あり

啓

帆船はるかに霞立つ沖

二

平成八年一月十七日 於 江東区芭蕉記念館

連衆 式田和子 諏訪欣二 橋野代々子

梅田利子 青木秀樹

歌仙「初東風や」

内田麻子

捌

蛍流るる故郷の駅

月中天ラムネの玉のぼんと抜け

麻子

訪へば残れる羽衣の松

あかり

鮫鱈鍋昔語りのきりもなく

初東風や十国峠富士の晴

郁子

奔放に生き太郎逝きたり

子等衆しげに話す年玉

守男

口紅の外国ブランドたまりつつ

軒の古巢に帰る燕

英子

鳩鈴なりに止まる電線

白木連月の光に色さやか

健

散りかかる薄墨の花夕まぐれ

仕事離れて買ひしパソコン

郁

遍路の旅の笠の軽やか

響き来るシンセイザイ巧みなる

健

平成八年一月十七日於 江東区芭蕉記念館

窓辺のふたり声もひそひそ

男

連衆 中田あかり 東郁子 近藤守男

得たる愛桃源郷に憂ひあり

り

佐古英子 緒方健

酒肴村の鎮守に神頼み

郁

夢の枕に雪女顕ち

社いっばいの蛸を聴く

男

岬から岬へかかる冬の虹

延長戦球場照らす望の月

同

ジェラシーの燃えつからみつ闇の闇

焼栗かじり帰途はちりぢり

健

ピアスがひとつ失せし耳朶

キャラクターグッズベティをお土産に

り

指物師銀細工師の住める町

小川渡れば魚影隠るる

同

銭湯帰り月仰ぎつつ

重文の合掌の郷花万朶

郁

法螺ばなし肴に酌みぬ新走り

傘寿を祝ふ宴うららか

健

サロンエプロン栗を煮るらし

話好き声のくぐもる春の風邪

英

講義録フロッピーからとり出して

漢方薬の流行る口伝で

麻

般若心経空と無ばかり

長安のこれより西へ絹の道

郁

効能は似たりよったり鍼灸院

詐欺師高僧王子隊商

り

お蚕さま飼ってへそくりとする

トリユフなど見つけ上手の豚を飼ひ

英

ピカソ展見終へし余韻花の下

幼な娘にピアスあちこち

男

うなり風舞ふ利根川の堰

胸ゆすり蛮族の美女迫り来る

英

跡目を継いでCDを出す

父を決めるは足の親指

り

辞書ひいてパーチャルリアリティーなほ不明

宰相も艶聞のあるうちが華

男

呑んだら乗れない車開発

歌仙「芭蕉稻荷」

篠原達子

捌

まづたのむ芭蕉稻荷や初懐紙

切山椒売る店の格子戸

紋白蝶ふたたびみたび訪れて

新入生のかかやける顔

飾りたる雛の瓔珞月に揺れ

さしむ牛車にたちのぼる香

名水の大瓶とどく染屋口

跡目を継いでCDを出す

辞書ひいてパーチャルリアリティーなほ不明

呑んだら乗れない車開発

千草を積みたる陰へいざなはれ

幼馴染はひとの妻なる

富

窯ぐれと言はれ十年山ごもり

香

ジンバブエには象が増え過ぎ

路

原子力なしではすまぬ世となりぬ

同

旅ゆく我に風の身に入む

乃

花相撲しょっきりの背に昼の月

路

ままかり鯨が好物の爺

乃

民謡のラップ八木節文化祭

富

なれすぎてゐて退かぬ鳩ども

香

石畳短銃ひそとふところに

乃

IRAうからはらから

豊

岬から岬へかかる冬の虹

富

夢の枕に雪女顕ち

香

ジェラシーの燃えつからみつ闇の闇

富

ピアスがひとつ失せし耳朶

路

指物師銀細工師の住める町

富

銭湯帰り月仰ぎつつ

豊

法螺ばなし肴に酌みぬ新走り

路

サロンエプロン栗を煮るらし

香

講義録フロッピーからとり出して

乃

般若心経空と無ばかり

香

効能は似たりよったり鍼灸院

路

お蚕さま飼ってへそくりとする

富

ピカソ展見終へし余韻花の下

達

うなり風舞ふ利根川の堰

豊

平成八年一月十七日於 江東区芭蕉記念館

連衆 百武冬乃 倉本路子 若松香

村田富美 高橋豊美

歌仙「大川の」

須田智恵 捌

大川の流れ静かや初懐紙

智恵

南瓜頭がついと覗きぬ

碧

墨を摺る辺に色のなき風

津

年賀の札を交はず連衆

千町

早成も晩成もせずそぞろ寒
自然石にて生前の墓

町

湖静か名残の月に誘はれて
トトロ現はる木の実落つ径

津

楽屋口ミモザいっぱい贈られて

彌

山頂のくつきりと頭つ夕まぐれ
インターネットで豆腐売買

彌

アイーダに見とれ聞き惚れ金縛り
軒高々あたりかまはず

安

受験要項置かれたる棚

政志

円安を喜び又も落ち込みて
思はず知らずうたた寝の人

志

咲き初むる御衣黄楊貴妃花の札
蝸蚪の水槽覗くグループ

弘

月影に巢からこぼれし雀の子

美恵

薄墨の花散りこめる能舞台
園に満ちたるメーデーの歌

智

はだれ雪拜むキリスト高十字
佐良良峠薬箱背負ひ

啓

郷土料理は父の手作り

和弥

平成八年一月十七日於 江東区芭蕉記念館
連衆 原田千町 八代彌 峯田政志

弥

商才はあれど文才画才なく
底の知れない住専の闇

久

やまと路の寺に憩へば深庇

碧

山口美恵 権頭和弥 松本碧

弥

伝書鳩インターネットで忘れられ
炉開の席めづる香合

安

ジーパンとシャツ彼とおもやひ

町

平成八年一月十七日於 江東区芭蕉記念館

智

綿入れの裏はちりめん老芸者
あの手この手で迫る年下

津

コードレスホーンと添ひ寝の末娘

志

若葉の頃の長い入院

恵

寝ては夢醒めては虚ろ恋に病み
待ちぼうけなり月は月蝕

啓

若葉の頃の長い入院

恵

伝書鳩インターネットで忘れられ
炉開の席めづる香合

安

本祭男五十の正念場

彌

肩書き並ぶ名刺仕上る

彌

賑はへるハイド・パークに蜻蛉飛ぶ
りんご刻みてジャムにする姉

啓

籠の虫朱房を垂らし月を呼ぶ

町

初旅や富士に笠雲ふんはり
淑気ほのかに松とれし宿

弥

養殖場餌に小魚をばつと撒き
スピーカーからマーチ流れる

弘

利酒すぎてほろほろの酔ひ

志

子ら集ひ鶯笛を吹くならん
春塵払ひたたくワープロ

弘

眠入れの裏はちりめん老芸者
あの手この手で迫る年下

啓

忘れたることを忘れし明治節

彌

歌仙「初旅や」 副島久美子 捌

弥

賑はへるハイド・パークに蜻蛉飛ぶ
りんご刻みてジャムにする姉

津

森鷗外が好きといふ甥

町

初旅や富士に笠雲ふんはり
淑気ほのかに松とれし宿

彌

賑はへるハイド・パークに蜻蛉飛ぶ
りんご刻みてジャムにする姉

同

ダム底となる今生の花万朶

弥

久美子

啓

ハッピーリタイア清明のころ

碧

おぼろ月残業の灯のいま消えて
回転寿司のしゃりは大ぶり

啓

眠入れの裏はちりめん老芸者
あの手この手で迫る年下

津

逃水を追ふ幼等ははるかにて

恵

子ら集ひ鶯笛を吹くならん
春塵払ひたたくワープロ

弘

眠入れの裏はちりめん老芸者
あの手この手で迫る年下

津

地球の浄化未だ進まず

町

おぼろ月残業の灯のいま消えて
回転寿司のしゃりは大ぶり

美津

眠入れの裏はちりめん老芸者
あの手この手で迫る年下

敏

中国の人口十二億を越え

碧

おぼろ月残業の灯のいま消えて
回転寿司のしゃりは大ぶり

好敏

眠入れの裏はちりめん老芸者
あの手この手で迫る年下

同

バーレーボールの床を拭く役

町

おぼろ月残業の灯のいま消えて
回転寿司のしゃりは大ぶり

安子

眠入れの裏はちりめん老芸者
あの手この手で迫る年下

久

シンデレラ冬の朝の指赤く

恵

またひとが訪れ始む異人館
ぐらりとくればしがみつく彼

敏

眠入れの裏はちりめん老芸者
あの手この手で迫る年下

安

狸狐の化かし合ふ恋

同

またひとが訪れ始む異人館
ぐらりとくればしがみつく彼

同

眠入れの裏はちりめん老芸者
あの手この手で迫る年下

同

盃の毒か媚薬か飲み交はす

町

またひとが訪れ始む異人館
ぐらりとくればしがみつく彼

啓

眠入れの裏はちりめん老芸者
あの手この手で迫る年下

同

銀のクルスの欠けて落ちたる

同

またひとが訪れ始む異人館
ぐらりとくればしがみつく彼

安

眠入れの裏はちりめん老芸者
あの手この手で迫る年下

同

歴代の古文書仕舞ふ蔵に月

同

またひとが訪れ始む異人館
ぐらりとくればしがみつく彼

同

眠入れの裏はちりめん老芸者
あの手この手で迫る年下

同

永平寺精進料理般若湯

同

またひとが訪れ始む異人館
ぐらりとくればしがみつく彼

同

眠入れの裏はちりめん老芸者
あの手この手で迫る年下

同

歌仙「摩天楼」

佛淵健悟 捌

摩天楼隼の風生まれけり 健悟
 日記始めの濃ゆく摺る墨 淳子
 初能に真白の足袋を踏み出して 英二
 まだファミコンの好きな兄弟 満子
 大川に月皎々と照りわたり 淳
 定時になれば虫の声かず 満
 男衆の黙りこくって茸狩 水壺
 赤いブーツを外車より見せ 二
 マンションに鍵を渡され舞ひ上がり 淳
 噂の種にならぬくやしき 壺
 誰とても一度は泳ぎたき宇宙 志紅
 鉄のアームが掴む夏月 満
 夜を継いで瓦礫を崩す修羅の街 二
 飲めない筈の酒が欠かせず 悟
 断筆の宣言をして翁顔 二
 東天紅の啼き出だす庭 紅
 ジンタまづ騒を引き出す花の山 壺
 銀のふらここ取り合ひて乗る 紅
 むつごらう匍匐の腹を裏返し 満
 一兵卒の墓標淋しき 二
 アカペラで故郷遠くファド唄ふ 淳
 似て非なるもの嘘とごまかし 壺
 ぼろ市に本当のぼろは消えてゐる 紅
 羽裏ちらりと覗く危な絵 淳
 指先に眼もつとはいふかしき 壺
 産婦人科はスーパ一になし 紅
 服を着て大迷惑のお犬様 淳

余暇の時間は英語会話に

月明に草野球なほ続きをり

鎮守の森は木の実しきりと

ピカッソもブラックもある文化祭

時の流れに合はぬ足並

百名山踏破する日を楽しみに

焼きおにぎりは母の伝授で

屋根裏に夢の工房花明り

四分音符の蝌蚪のちらちら

平成八年一月十七日於 江東区芭蕉記念館

連衆 上月淳子 日高英二 田村満子

今宮水壺 船本志紅

今宮水壺 船本志紅

今宮水壺 船本志紅

今宮水壺 船本志紅

今宮水壺 船本志紅

今宮水壺 船本志紅

今宮水壺 船本志紅

今宮水壺 船本志紅

今宮水壺 船本志紅

今宮水壺 船本志紅

今宮水壺 船本志紅

今宮水壺 船本志紅

今宮水壺 船本志紅

今宮水壺 船本志紅

今宮水壺 船本志紅

今宮水壺 船本志紅

今宮水壺 船本志紅

今宮水壺 船本志紅

今宮水壺 船本志紅

今宮水壺 船本志紅

今宮水壺 船本志紅

今宮水壺 船本志紅

今宮水壺 船本志紅

満

紅

淳

二

壺

満

淳

悟

紅

紅

紅

紅

紅

紅

紅

紅

紅

紅

紅

紅

紅

紅

紅

紅

紅

紅

紅

紅

紅

紅

紅

紅

紅

紅

バカを言っでは家族笑はせ

結構なだんご屋稼業月まろく

住専埋める税のやや寒

蟻螂が斧振りあげる縁の下

オカリナうまくなつた兄弟

花埃老校長の八字髭

大朝寝して夢のあはあは

耕の早始動する耕運機

勾玉出土山の辺の丘

芸術は爆発と言ひ人逝きぬ

一杯機嫌で浸るしまひ湯

ばっさりと脛を斜に鎌鼬

討入の日の橋桁の鳴り

義妹のもの言ふ癖のひたむきな

三カラットで嘘をまことに

歡喜天そっぽを向いて抱きあひ

無結社層の増える俳界

相撲取負け続けにて休場す

肘掛椅子に望郷の月

箱書は享保とありて後の雛

箔職人の叩く路次裏

スパゲッティチーズたっぷりさあどうぞ

ヒマラヤ猫の毛並つややか

花行脚はるか遠嶺を越ゆるらん

紙ふうせんを飛ばす子供等

平成八年一月十七日於 江東区芭蕉記念館

連衆 中川哲 椿紀子 下鉢清子

大窪瑞枝 小野シズ 久保田庸子

大窪瑞枝 小野シズ 久保田庸子

大窪瑞枝 小野シズ 久保田庸子

大窪瑞枝 小野シズ 久保田庸子

大窪瑞枝 小野シズ 久保田庸子

大窪瑞枝 小野シズ 久保田庸子

大窪瑞枝 小野シズ 久保田庸子

歌仙「初懐紙」

山崎一恵 捌

なつかしき友の笑顔や初懐紙

年賀の声もはずむ広縁

河原鶉漣かすめ翔び交ひて

自転車に積むパンジーの箱

抱く嬰をあやしつ眺む臘月

大小長短とりどりの靴

受持区信任神父うろ覚え

彼女迎へにアテネフランセ

すれ違ひぐつときたのよ歩道橋

ばったり止る古扇風機

中身無き首相の談話ががんばう

あしながをぢさん被災地に行く

月昇る匂ひ拡がる明石焼

銀杏剥くも一苦勞にて

牧閉す誰が忘れし時刻表

宅配便が先に到着

花の下外国人の大あくら

民具蒐集和布刈竿得る

畏まり姉と並びて雛の酒

三角函数みんな苦手で

悪童と原っぱ失せて昭和果て

再映希ふ「モダンタイムス」

嘆して賭場の殺気を吹き飛ばし

雪のだるまがかつと目をむく

コンクール特等きめし審査員

良妻賢母のタイプ嫌ひだ
観音とあがめお肌を拭はばや

お琴と佐助闇に寄り添ふ

ぼっかりと真夜中の月山の端

露払ひてはパット練習

輸入種に負けじと作るピーナッツ

夢追ふことも婆の生き甲斐

発掘の古代のままの布帛ありぬ

紅茶飲みつつハイドンを聞く

南から次々めぐる花の旅

風船売について行く猫

平成八年一月十七日 於 江東区芭蕉記念館

連衆 杉山壽子 橋文字 島村暁巳

五味蓉子 登坂かりん

歌仙「どんど番」

若尾よしえ 捌

注連はりてどんど番する袴宜ひとりよしえ

書初め小脇に集ひ来る子等 てる子

玻璃戸ごし囁りとみに賑やかに 遊

春日遅々とワープロを打つ 道子

弥生盡大作読破月闌けて 良彌

急行通過郊外の駅 利子

犬と猫連れて引越し核家族 ますみ

赤いドレスのよく似合ふ女 遊

X三と後で知ったが運のつき 道

病鉢巻き鬼の霍乱 遊
龍さまのオールバックは暑くるし み

エンデバーにて同胞活躍

地酒提げ月見をせんと訪へる

ままかり鮫と瀬戸の大橋 遊

蜻蛉も石の標にひと休み 遊

CMソング歌ふこども等 利

漫画家の筆塚に佇つ花万朶 遊

床几のどかに茶柱の立つ 遊

種案山子かぶる帽子も新しく 利

カメラ担いで遺蹟巡りを 利

トプカプの宮殿の門くぐり抜け 利

「一夜放れ」を株屋待望 遊

張り切って上着脱いだる鍋奉行 遊

柚湯しみみに伸ばす足腰 遊

派手に鳴る箏の環に地震かと 遊

貸間住まひのくどきひそやか 遊

恋模様眺め紙結び半世紀 道

壺公壺中に仙境の夢 道

巖松に黄山の月仰ぎ見る 道

焼米かじり列のしんがり 道

草相撲勝った負けたは問題外 道

長き生涯努力むくわる 道

分校へ寄贈のピアノ届けられ 道

オレンジの皮マーレードに 道

入綾のかぎす花の枝見つ消えつ 道

蛙ひよこひよこ跳べる畦道 道

*株の専門語で、一夜で急上昇すること 道

平成八年一月十七日 於 江東区芭蕉記念館 道

連衆 萩原てる子 雑賀遊 加藤道子 遊
佐藤良彌 武村利子 水鳥ますみ 遊

現代連句論のための序章 (1)

高橋 豊美

西鶴の話芸について、伊藤仁斎の第二子伊藤梅宇の随筆『見聞談叢』に「黒田侯御帰国の時、大阪の御屋敷へ召して、次にてはなさせ聞き玉ひ、世上へ出し、使番、聞番、留守居の役にいひつけ侍らば、かゆき所へ手のとどくやうにあらん人がらと称し玉ふよし」とある。政治経済文化の社会全般にわたって卓見を披露し、古今東西の珍話奇話笑話に、おおいに黒田侯の御感あったということである。これは新日本文学大系本（『西鶴諸国ばなし解説』井上敏幸）よりの孫引きだが、同書に「俳諧師は一方で、中世の連歌師同様、咄の衆の役目をも伝統的に受け継いでいたと考えられる。（中略）其角もまた大名に召されて咄をしていたことは夙に指摘されており（中略）咄の専門家であった西鶴と、俳諧師西鶴とは、（このような意味において）何の矛盾もなく重なっていた」

西鶴・其角は別格にしても、市井の宗匠といえども話芸の少しも心得て居なくては、門戸は栄えなかったに違いない。俳諧が懐紙に残された作品のことだけと考えては、なぜ俳諧が江戸文化の教養を担い流行したかについて理解することはできない。

日本の詩歌の伝統は、共同性の上にある。

「『万葉』以前の歌は呪文といふ性格が濃厚で、それが『万葉』あたりから社交の際の道具という色調が強くなり、そこから芸術性が生じ、その芸術性ないし文学性は『新古今』で極点に達したものの、それでもやはり呪文としての和歌といふ性格、社交の具としての和歌といふ性格は、はっきりとあった。」

（『和歌は枕詞を捨て王朝和歌と訣別』丸谷才一）「詩を作り、またそれを享受するということが、社交の最も洗練された一形式でもあったのです。」（『日本の詩歌』大岡信）そのためには、古歌を詠じることのできるような教養が作者と読者の両方にあり、読者がすなわち作者であるという関係があった。

つまり江戸時代における俳諧は、宮廷文化から町人文化への文化の主体の移行による連歌の世俗化であり、その流行は市井において生きのよい教養を習得し、異なる階級職業のひとびとの交流する場として有効に機能したことによるものである。

幕末から明治のはじめにかけて信州伊那谷に俳諧の風が起った。「俳諧の家はすなはち農耕または商賣の家である。富まないといつても、好める道ならば、旅まはりの俳諧師に一夜の宿を貸して手づくりのどぶろくをのませるぐらゐのことはしたのであらう。柳の家井月といふ風来坊がいかなる因縁に引かされてか、ふらふらと舞ひこんで来るにはあつ

らへむきの土地がらであった。」（『諸国畸人傳』石川淳 以下引用同書）

この井月およそ三十年あまりを、ついに庵を結ばず伊那のあちこちをさすらい寄宿するうちに過ごして、枯田の路傍に大往生した。

「伊那谷の風来坊の生活がそれでもよく何十年といふ時間に堪へることをえたのは、ひとからめぐまれた酒のせるではなくて、そのころいきに於て、トボトボのグズグズながら、遠く蕉風の片雲にぶらさがってゐたからにちがひない。風来坊はあへきながら、俳諧といふ水がぶがぶとのんで、わづかに息をついでゐる。」井月を生きつづけさせたものは、江戸三百年の風流の余徳である。

井月の没したのは、明治二十年のこと。

「言文一致は、明治二十年前後の近代的諸制度の確立が言語のレベルであらわれたものである。」（『日本近代文学の起源』柄谷行人）言文一致という制度の確立に「内面の発見をみるならば、四迷の『浮雲』においての苦悶はそれまでの人情本等の文体では自己表現がすでにできなくなっていたことによる。子規が西洋近代文学に学んだ（子規が理解した限りでの）近代詩として、俳諧の発句を俳句に仕立て直したのは、同じ運動である。子規による紀貫之批判は、日本の詩歌の伝統の切断であった。

さて、この句は発句だらうか俳句だらうか。落栗の座を定めるや窪溜り 井月

マイホーム

五味 蓉子

「畳屋さんちの隣に引越して来たケイちゃん」
広子さんが連れてきた女の子は、わたしと桃ちゃん顔をすつと見て、「仲良くしてね」と大人っぽく首をかしげた。

仲間が四人になったので、ままごとの家は二軒に分れることになり、わたしとケイちゃんが新しいゴザの家に移った。

「豆腐は賽の目切りだよ」「とつとと掃除しちまいな」こまめに動くケイちゃんに、わたしは自分から進んでお母さん役を譲った。

ご馳走の材料の木の葉を使い尽くして、ままごとはおしまいになり、地面に棒で自分の本当の家の絵をかくことになった。

「入り口を入るとご飯を食べる部屋があつて、そこから廊下をずっと行くと兄ちゃんの部屋でしょ。そいでまたどんどん廊下を歩くとわたしの部屋。それからまた・・・」ケイちゃんの家は沢山の部屋が並んでいるらしい。

広子ちゃんと桃ちゃんは疑わしそうな顔をしたがわたしはケイちゃんの話は無条件に信じた。何故ならケイちゃんが引越して来たのはあそこのブリキ屋さんが居た家だったから。

あそこはわたしの通学路の途中にある不思議な一画だった。共同水道に並んで、屋根がつながっている家が四軒建っていた。角の家

にはおばあさんがひとり住んでいて、暑いときは湯もじ一枚で乳房を出したまま、共同水道で洗い物をする。畳屋さんちの角刈りの小父さんは近所の人には愛想がいいのに、ぶっ殺すぞ！と始終小母さんとケンカをした。

ブリキ屋さんは夜逃げをしたのだという。初めて聞いた「夜逃げ」という言葉は、わたしの想像力をかきたててやまなかつた。その隣は仕事師の小父さんと顔色の悪い男の子が住んで居て、小父さんがブツブツ何か言いながら、自分より体の大きな男の子の口にご飯を運んで食べさせているのをよく見かけた。

どの家も開けっ放しで、家の中が全部見えたがそれぞれに、わたしの知らないヒミツが何処かに隠されているような気がした。

ケイちゃんの家は引越して来た日から、何故か表の戸は閉めてあつた。戸の奥に続いている幾つもの部屋を想って、其処を通る時わたしは胸がドキドキした。

奥の部屋を見せてくれると約束したのにケイちゃんはそれから間もなく何処かへ引越し、新しい友達が出来て、わたしはあそことは別の道を通学路にした。

今の時節は毎朝新聞に、重たい程マンションや家の広告が折り込まれてくる。「ゆとりのファミリーライフ・二階建」「夢のあるワイドな3DK」等の見出しのチラシを手にする度、ケイちゃんの家は大きかったなあとしみじみ思う。

連句と酒 *

「花見酒」

中川 哲

子供のころ、町内の花見には飯田橋のあたりから屋形船を仕立てて神田川を下り、向島あたりまで連れていかれてはしゃぎまはった記憶がある。

近頃はなにかと億劫になって、花見らしい花見もしなくなったが、三十台にもなるわが家の馬鹿息子は毎年、男女入り交りの悪友たちと谷中の墓地が良い穴場といふことで、昼下がりから夜半まで「花より酒」の宴を繰り広げるのが恒例になってゐるらしい。

その日になると、縁の下から引張り出した蕨を小脇に丸め、背負ひ袋に一升瓶と、しこたまの握り飯などを詰め込んで、男夜鷹といふ形でそはそはと出かけていくのである。

ことしは「酒恋二十韻を巻く」などとほざいてゐるが、やっぱり酒に飲まれて、ものにならなかつたらしい。親に似た子の鬼っ子である。

◇猫蓑会案内

連句興行

▽深川連句 場所 江東区芭蕉記念館
日時 第一日曜日 一時

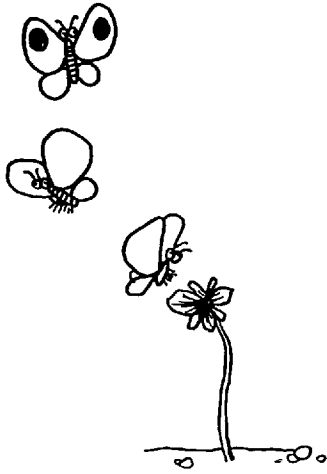
▽柏連句 場所 柏市近隣センター
日時 第二日曜日 一時

▽猫蓑会 場所 江東区芭蕉記念館
日時 七月十七日(水)

歌仙興行 正午より

▽『猫蓑作品集VI』が出来上がりしました。
内容等新しくなりました。多数お買い求めください。

〒二七七 柏市加賀二一二十一
梅田利子宛



落語と連句

橋 文字

五月雨に鳩の浮巢を見にゆかん
この句について『三冊子』には「詞に俳諧なし。浮巢を見にゆかんと云所俳也」と書かれています。わざわ五月雨の中を浮巢なんぞ見にいこうという、その辺の遊び心が何とも素敵です。

この遊び心で、「江戸」をさまよっているうち、猫蓑連句にも行き当たったのでした。「江戸」といっても、「江戸の町」でもあり、「江戸時代」でもあり、遊びの種には事欠きません。その一つ、落語横丁を歩いてみたら、連句とよく似ているのに驚きました。亡くなった彦六さんによると、落語のおちは皆「考えおち」だということですが、これは発想の転換のことで、つまり「転じ」です。また、結末をはっきり云わず、余白にして受け手に渡すというところも似ています。人情断は別として、たとえば、「あたま山」では自分の頭の池へ身を投げたという。「首提灯」斬られた首を持ち上げて走って行く。「粗忽長屋」俺の死骸を抱いている俺は誰だろう。「穴どろ」穴に落ちた泥棒は？ どれもどうなったのかまでは云わない。聴き手が想像していると、びったりの間でおちが付く。おちがストンと決まるのは、付句が「いい付

味」で決まるのと同じ気分です。落語の余白は余意余情ですが、無駄な言葉や説明は出来るだけ省き、選ばれた簡潔な言葉で云い果せるのも連句に然りです。

落語に季語はありませんが、庶民は庶民なりの江戸の人々の暮しが、季節感たっぷりな描写されており、季節に対する豊かな感受性の描き出す風物詩とも云えます。「御慶」に始まり「千早振る」「初天神」「雛鏝」「長屋の花見」「洒落小町」「佃祭」「盃の殿様」「目黒のさんま」「らくだ」「芝浜」、これだけで春夏秋冬の江戸が彷彿として、江戸に遊ぶ心地がします。

横丁のご隠居は大抵のことは何でも知っていて、俳諧にも蘊蓄をたれます。

「雑俳」(「雪てん」ともいう)には、二尺ばかりの大馳

この行末は何になるらん
というのがありますが、はて何でしょう？

彼の西行法師も、落語に登場するときは、ただの失恋青年になってしましますが、

伊勢の海阿漕ヶ浦に曳く網も
度重なればあらはれにけり

の古歌、謡曲をもじった「西行」はその余情、すっきりしたおち、雅と俗の混淆でまるで俳諧じゃないかと思えます。

落語と連句、遊び心を満たすにもってこいのこの江戸の遺産を、これからも大切に楽しみたいと思います。

東明雅

【Q】 第三の作り方について、『三冊子』では「大付にても転じて長高くすべし」となりとありますが、『去来抄』では正秀亭で脇句に合わない第三を出した去来が芭蕉に叱られています。矛盾するようですが、どう考えたらよいのでしょうか。

【A】 第三はよく漢詩における転句にたとえられますが、一句全体が前句の世界・気分から全く一転するのではなくて、前句を受けながら、一句の中で大きく転換するところに、漢詩でいう転句と異なるところがあります。

「大付にても転じて長高くすべし」というのは、前句との付味は全く考えなくてもよいというのではなくて、前句との付味は大抵、まあまあほどならば、それでよいとして、それよりも転じて重点をおき、格調が高く、のびのびとした句を作れということでしょう。それでこの去来が叱られた例を考えてみますと、この時、

二つにわれし雲の秋風 正秀
 という脇句に対して、去来は次のCをこの時第三として、付けたのですが、芭蕉は気に入らず、

A 中連子中切りあくる月影に
 B 月影に手のひら立つる山見えて
 C 竹格子陰も^マに月澄みて
 それを一直してAの句を治定しました。

この時芭蕉は「二つにわるゝと、はげしき空の気色成を、かくのびやか成第三付ル事、前句の位をしらず、未練の事なり」と言って一晩中、去来に突っかかったそうです。

それで去来が弁解して、「実はあの時Bの句を考えておりましたが、ただ月が格別に清らかであるという点を詠もうとばかり拘って、前句の位を忘れてしまったのです」と言うところから芭蕉は「そのBの句を出したならば、どれ程よかったか分からない」と言ったそうです。

芭蕉の判定によると、Bの句は前句のはげしい気分に対して、山の険しさが一応響き合っていて、「大付にても転じて長高くすべし」という第三の条件に一応叶っているのに対して、Cは前句のはげしい気分を全然無視して、ただ月の清らかなことをのんびり述べたにすぎない。それでは大付どころか、全く前句に付いていないと芭蕉は考え、思いあまってAの句を自分で作って去来に与えたのでしよう。

これならば中連子（武家屋敷の中門の左右に設けられた連子窓か）という物と言ひ、「中切りあくる」という表現と言ひ、見事に前句の位に応じながら転じているのです。これが第三の転じの見本であります。

◇ 猫養発展基金ご協力有難うございます。
 一万円 田中一火女
 三万円 根津美紗
 (敬称略)

◇ 基金の口座 富士銀行新宿西口支店
 普通3376045 猫養基金

.....S.....S.....
 あとがき

○ この頃は雲雀の声によく起こされる。『冬の日』に、「うれしげに囀る雲雀ちりちりと」という句があるが、「雲雀らに無駄な時間のなかりけり 弘子(木語)」という句に多く共感してしまふのは、こちらのせわしない生活の反映なのか。それとも、環境を失いつつある雲雀らの啼き声は實際変化しているのか・・・などと考察しているとなかなか起きられない。いずれにしても、元禄の雲雀の無心なさまがうらやましい。

季刊 「ねこみの通信」第二十三号
 発行者 猫養連句会
 編集人 下一九五 町田市金井6-7-16
 佛淵健悟
 印刷所 アトリエ・Neko